

展示記録

郁達夫八高入學百周年記念展示會

高
文
軍

はじめに

一 展示にあたって

二 展示内容

(一) バナーとパネル

(二) 展示ケース (1) 郁達夫の名古屋における文学活動

1、小説「沈淪」をめぐって

2、文学人生の序章

3、服部擔風との交流

(三) 展示ケース (2) 書籍

1、郁達夫の著作、その他

2、郁達夫に関する研究書

3、八高、その他か関連資料

(四) ファイルコーナー

1、『新愛知』新聞

2、『文字禪』

3、郁達夫関連する新聞記事

(五) その他

1、「郁達夫早期文学略表」

2、郁達夫漢詩 書

3、郁達夫八高卒業証書

4、映像コーナー

むすびにかえて

はじめに

本稿は、「郁達夫八高入学百周年記念展示会」について、その内容を紹介するものである。

「郁達夫八高入学百周年記念展示会」（以下「本展示会」と略）は、二〇一五（平成二七）年九月二六日（土）から同年十月九日（金）を会期に、名古屋大学中央図書館2階ビブリオサロンにおいて開催された（展示時間は、九時～二十時、休館日なし）。名古屋大学大学院文学研究科中国文学研究室と高文軍（桜花学園大学教授）との主催によるものである。

本展示会実施に当たり、学芸員と上級デジタルアーキビスト資格所有者王莉莉氏が存分に本領發揮し、展示物作りの主役を担っている。その他にご協力いただいた、名古屋大学大学院文学研究科中国文学研究室佐野誠子氏、大島絵莉香氏、長谷川浩平氏、名古屋大学大学院文学資料室堀田慎一郎氏、名古屋大学附属図書館医学部分館、名古屋大学教育発達科学図書室、名古屋大学附属図書館、愛知県立中村高等学校非常勤講師郁敦子氏、南山大学アジア太平洋研究センター長蔡毅氏、手島伸子氏の各者に謝意を表す。

一 展示にあたって

本年は、中国人作家郁達夫が、名古屋大学旧教養部の前身である旧制第八高等学校（八高）に入学して百周年に

あたる年である。今回はこれを記念し、郁達夫が名古屋周辺でたどった足跡に焦点を当てて振り返ることとした。

郁達夫は一九一三（大正二）年、魯迅や郭沫若と同じように日本に留学した。一九一五（大正四）年の秋、八高の三部（医科）に入学、翌年一部（文科）に転じ、一九一九年夏までの約四年間を名古屋の地で過ごした。後ほど、東京帝国大学在学中、留学生仲間の郭沫若、張資平、成仿吾たちと文藝雜誌発行の計画を進め、当時中国新文壇における大きな文学結社―「創造社」の創立となり、出世作『沈淪』が生まれた。

自分の留学経験を元に書かれた小説『沈淪』は、大正初期の名古屋（N市）を舞台に、異郷に学ぶ孤独な高校生の、満たすことのできない愛の渇きと母国の民族的な屈辱感を重ねて、大胆率直な自己暴露と、赤裸々な性欲描写とが不道徳だと当初激しく非難を浴びながらも、中国文壇に新鮮な刺激を与えた。他の二篇を含んだ短編小説集『沈淪』（一九二二年、上海泰東書局）は、魯迅の小説集『呐喊』（一九二三年）より一足早く、中国新文壇初の小説集となった。帰国後、職を転じながら、精力的に文学活動を引き、「春風沈酔の夜」、「ささやかな供え物」、「蕩蘿行」、「過去」、「遅咲の木犀」、「わが夢わが青春」などの傑作を次々と世に出し、中国新文壇に不動の地位を築き上げた。中国のみならず、日本も含めて多くの研究者の注目を集めている。戦前から、小田嶽夫等によりその作品を翻訳され（小田嶽夫訳『過去』春陽堂一九三二年十一月、等々）日本でも愛読されていたようである。

一九九八年、八高創立九十年を記念して八高会により郁達夫を顕彰するため、名古屋大学東山キャンパスにその文学碑が建てられた。

しかし、郁達夫の八高時代四年間の活動については、世間に知られていないことが多々ある。主催者の高文軍は日本の先行研究を踏まえ、独自の調査によって収集した資料、写真などを厳選し、名古屋大学院文学研究科中国文学研究室と共同でこの記念展示会を企画した。また名古屋大学教育発達科学図書室と名古屋大学附属図書館医

学部分館の協力により、それぞれが所蔵する貴重な資料も展示された。

百年前、若き異国の留学生は名古屋の地で、何を感じ、何を書き残し、どのような青春を送ったのだろうか。名古屋大学の学生を含み、地元名古屋、ひいては中部地区の人々に、本展示会をきっかけにもっと知って頂くことは主催者の懇願である。

二 展示内容

(一) バナーとパネル

バナー 郁達夫八高入学百周年記念展

百年前の一九一五（大正四）年九月、一人の中国人の若者が名古屋の地にやって来た。名は郁文、字は達夫。旧制第八高等学校大学予科第三部（医科）に入学して、翌五年九月、第一部丙類（文科）に転じ、合せて四年間を名古屋で学生生活を送った。彼は何を経験し、何を残したのか。彼の輝かしい青春の足跡をここにたどる。

パネル展示 郁達夫と名古屋

郁達夫の小説「沈淪」（文中における「N市」と名古屋の関係について、終戦後から日本文学者により指摘された。しかし、自伝的小説とされるが故に小説の主人公である「彼」イコール作者郁達夫のイメージが強く、郁達

夫の本当の姿があまり知られていないことは否めない。八高在学中、彼は積極的に出かけ、最初は名古屋周辺を中心に、しだいに関西や関東方面まで足を延ばし、一外国人の目で、日本の自然景観の美しさを発見し、日本文化の奥義を心得ていた。それらを漢詩の形で表現し公の場に発表した。つまり郁達夫の文学者の歩みは、この名古屋の地で始まったと言っても過言ではない。

それと同時に漢詩を通して、留学生としては珍しく日本文人との交流も行われ、特に弥富在任の漢詩人服部擔風との心の通じ合った漢詩唱和、やりとりは、高いレベルに達していた。

入学百周年記念をきっかけに、小説「沈淪」の中の「彼」ではなく、郁達夫の八高時代に改めてスポットを当てることは、彼の内面的な成長ぶりを明らかにし、ひいては日中文化交流史に新たなページを書き加える価値のある試みでもある。

(二) 展示ケース(1) 郁達夫の名古屋における文学活動

1 小説「沈淪」をめぐる

郁達夫の代表的な作品として一九四〇年に岡崎俊夫により翻訳されて出版され、日本人読者によく知られていたが、時が過ぎ去るにつれ、新たな出版もなく知る人も少なくなった。この名古屋の地を舞台にした小説をもう一度甦らせるために、本展示会では、小説のプロットを充分に勘案したうえで、「沈淪」から抜粋した文章に、当時の名古屋の写真資料などを添えて紹介した。百年前の町の様子を見ることにより小説に描かれた一人の留学生の様々

な体験や心情に思いをさせ、いつそうの理解を深めることができるのではないかと主催者が期待している。

2 文学人生の序章

八高に入学して間もない時から、郁達夫は既に筆を取って、漢詩を創り始めた。一番早いものは、入学当月に書いた「中秋夜中村公園賞月兼弔豊臣氏」（大正四年九月二十三日）は、一九一五年十月七日の上海『神州日報』に掲載されたあと、八高の『校友会雑誌』第十六号（大正四年十一月）にも掲載された。その後、彼は積極的に犬山をはじめ名古屋周辺各地へ出かけ、自然景観の美しさを漢詩に詠み込んで、地方新聞『新愛知』にも投稿し始めた。彼の文学的な人生は、この名古屋の地で始まってと言っても過言ではない。

残念なことに、このような事実に関し、知っている人はごくわずかなようだ。今回は郁達夫の漢詩と、昔の資料写真と現地調査で撮った写真を合わせて展示し、漢詩にあまり縁のない人にもわかりやすく、時の塵に埋もれている事実を多くの人々に伝えようと試みた。

3 服部擔風との交流

愛知の地で名高い漢詩文学者服部擔風は、当時『新愛知』漢詩欄の選評者の一人であった。郁達夫の投稿詩について高く評価した。一九一六年暮春、二十歳に満たない八高生の郁達夫は、当時弥富町にある服部擔風宅を訪ね、初めて擔風先生に面会した。帰りに、人力車に乗る郁達夫を年長者である擔風先生は歩いて弥富駅まで見送り、感

銘を受けた郁達夫が、「訪擔風先生道上偶成」の詩を書き、擔風先生は「次韻詩」を以て評語とした。その後、漢詩を通じて二人は深く親交を結んだ。

この部分の内容は、服部擔風先生の写真や、嘗て服部擔風宅にあつた「藍亭」と擔風手書きの「藍亭」額の写真、現在弥富市にある「擔風筆塚」、地元の漢詩愛好者達が建てた郁達夫詩碑の写真などと共に、郁達夫と服部擔風の漢詩唱和の作品を紹介し、日本であまり紹介されていない、郁達夫が八高を卒業した際擔風先生が描いた送別の梅花絵と詩の写真も添えて展示していた。

(三) 展示ケース(2) 書籍

1 郁達夫の著作、その他

◎『沈淪』岡崎俊夫訳 東成社 一九四〇年『現代支那文學全集』第二卷

名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵。この翻訳本が出版された時郁達夫はシンガポールで新聞の編集に携わっておりこの本を手にとったかは不明であるが佐藤春夫が装丁をしており出版までにやり取りはあつたものと思われる。

◎『現代中国文学6 郁達夫・曹禺』松枝茂夫ほか編集 河出書房新社 一九七一年、名古屋大学附属図書館所蔵。

「沈淪」を含む短編6編と日記9種が収められている。一九七二年の日中国交正常化を目前に中国への関心が高まっていた時代の出版である。

◎ 『第八高等学校一覽』 第八年度 及び 第九年度

名古屋大学教育発達科学図書室所蔵。第八高等学校が毎年刊行していたもので多くの基本事項やデータが掲載されていた。学生名簿もあり、「郁文」の名を確認できる。

◎ 『第八高等学校同窓会名簿』 昭和五十八年度版 八高会 一九八三年五月発行。第九回（大正八年七月卒業）第一部丙類 に「郁文 死亡」とある。

◎ 『郁達夫文集』 全十二巻 三聯書店香港分店ほか 一九八二年。郁達夫没後初めて刊行された全集。郁達夫が晩年を過ごしたスマトラ島で郁達夫のもとで働いていた張海泉氏のサインがある。また、各巻冒頭に写真もかなり掲載されている。

2 郁達夫に関する研究書

◎ 『郁達夫傳 その詩と愛と日本』 小田嶽夫 中央公論社、一九七五年三月。日本初の郁達夫伝記、平林たい子 賞受賞、郁達夫への「鎮魂の書」と評価されている。

◎ 『郁達夫 その青春と詩』 稲葉昭二 東方書店 一九八二年四月。はじめて郁達夫の青春時代―八高留學時代を中心とする研究著書。「長年にわたって発掘した新資料を駆使しつつ、彼の文学者としての自立へのあがきと、その屈折した軌跡を、実に生々しく浮かび上がらせてくれた。」と評価されている。

◎ 『郁達夫 悲劇の時代作家』 鈴木正夫 研文出版、一九九四年六月。郁達夫研究の論文集

◎ 『郁達夫資料―作品目録・参考資料目録及び年譜―』、東洋学文献センター叢刊 第五輯 東京大学東洋文化

研究所附属東洋学文献センター、一九六九年十月

◎ 『郁達夫資料補篇（上）』 東洋学文献センター叢刊 第十八輯 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九七三年三月

◎ 『郁達夫資料補篇（下）』 東洋学文献センター叢刊 第二十二輯 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九七四年七月

◎ 『郁達夫資料総目録附年譜（上）』 東洋学文献センター叢刊 第五十七輯 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九八九年三月

◎ 『郁達夫資料総目録附年譜（下）』 東洋学文献センター叢刊 第五十九輯 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九九〇年二月

以上の五冊は、伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫三氏の共同作業による、日本代表的な郁達夫資料集大成で、資料の豊富さと厳密性は、世界範囲で誇れるものである。

◎ 『郁達夫留東遺芳』 八高創立九十年記念祭実行委員会編

八高創立八十年記念祭実行委員会により発行されたものの復刻版、「沈淪」翻訳、漢詩、年譜など小冊子ながら充実した内容である。

◎ 『郁達夫在名古屋』 高文軍 中国南京大学出版社 二〇一五年七月。

資料収集とフィールドワークにより、郁達夫が名古屋で過ごした日々を追跡調査、「沈淪」の他、漢詩や日記などを駆使し、名古屋時代の青春像の全容を明らかにしようとするものである。

そのほかにも、中国語の関連する書籍ある（略）

3 八高、そのほか関連資料

- ◎『やとみ文学散歩』弥富文学研究会 二〇〇〇年
弥富町（現弥富市）の漢詩・俳句・短歌の愛好家により刊行、弥富の漢詩人服部擔風に師事した郁達夫について触れている。
- ◎『NHKテキスト中国語講座』二〇〇三年二月号
藤井省三のエッセイ「二〇〇〇年大江健三郎の北京訪問」の中で大江健三郎が母から「郁達夫似の福耳を持っているから大作家になる」と言われたというエピソードを紹介している。
- ◎季刊『文科』紀伊國屋書店 一九九六年（特集「郁達夫」）
特にNHKBSで放送されたドキュメンタリー番組「郁達夫 感情旅行」のディレクター牛山純一の記事が興味深い。また小田嶽夫訳の「春風沈酔の夜」も再録されている。
- ◎『中国現代文学珠玉選』丸山昇監修 二玄社 二〇〇〇年
短編小説「蔦蘿行」の邦訳が収録されている。
- ◎雑誌『東方』東方書店 一九九四年六月号
稲葉昭二「郁達夫銅像建立と教育基金会設立」
- ◎『郁達夫と大正文学』大東和重 東京大学出版会 二〇一二年
郁達夫が大正時代の日本の文学者から受けた影響について述べているが郁達夫が日本のみならず海外の文学を消化していたかについても触れている。

◎『スマトラの郁達夫』鈴木正夫 東方書店 一九九五年

太平洋戦争と中国作家と副題にあるように敗戦後日本軍に殺害された郁達夫の晩年の生活と死の真相についての記録。

◎『寮歌集』八高創立七十年記念祭実行委員会 一九七八年

大正時代からの寮歌が収録。また寮歌にまつわるエピソードも興味深い。

◎『八高五十年誌』八高創立五十年記念事業実行委員会 一九五八年

当時に寄せられた郁達夫と同時代八高で青春を送った人々が寄せた文章から当時の学生生活、名古屋の街の様子が伝えられている。(写真省略)

(四) ファイルコーナー

1 『新愛知』新聞

『新愛知』(中日新聞の前身)新聞 漢詩欄は当時弥富の服部擔風が選者であつた。郁達夫の漢詩は頻繁に掲載されている。紙面での服部擔風とのやりとりが郁達夫の創作意欲の源になつたであろう。

一九一六(大正五)年五月三日から、一九一九(大正八)年十月十六日までの四年間、計二十一首の漢詩(或は句)が掲載され、展示会でそのうちの十四点のコピーをファイルに入れ展示した。

2 『文字禅』

大正時代に、「聲教社」による発行した漢詩雑誌である。郁達夫の漢詩は、その第十六号（大正七年五月）、第二十号（大正七年九月）、第二十四号（大正八年一月）、第二十五号（大正八年二月）に掲載された。そのコピーを展示した。

3 郁達夫関連する新聞記事

◎ 「郁達夫と名古屋（上）（下）」 岡崎俊夫 『中京新聞』 一九四七年八月三日、四日。

「郁達夫—この名は日本人のあいだでもかなり親しい名である。」とあり、また「沈淪」について、「この中国新文学初期のメルクマールとも言うべき作品が名古屋から生まれたということは、名古屋の人にとつて記憶すべきことであろう。」と書かれているのは興味深い。

◎ 「名古屋と中国作家」 近藤春雄 『中部日本新聞』 一九五〇年七月十二日

冒頭「松江という町は小泉八雲によつて世界に知られているといつても過言ではないが、同じように外国の文学者により、名古屋の町が外国に紹介されたという例はどんなものであろうか。（中略）それは八高に留学していた中国の作家郁達夫である。」と述べている。

その他 戦前から、名古屋大学に郁達夫文学碑が建てられた迄の新聞記事や、弥富町（現弥富市）に文学碑が建てられた際の新聞記事 など

あと、展示した書籍の関連ページのコピーと『八高五十年誌』コピー（一部）

(五) その他

1 「郁達夫早期文学略表」

作品の多い中国人作家郁達夫に関する研究著書や資料集はたくさん出ているが、名古屋留学四年間をメインに「早期文学略表」を作るのは、はじめてのことである。彼の八高生の履歴と、代表的な漢詩作品をチョイスして、さらに関連する写真を入れ、年表の形でその若き留学生の歩みを表している。

2 郁達夫漢詩 書

本展示会に、郁達夫の漢詩作品の中から、青春時代の抱負と、凡俗ではない自分の志や才能を持っている自信を誇っているものを二首選択し、南山大学蔡毅教授と日本人書家手島伸子による揮毫したものを飾っていた。

3 郁達夫八高卒業証書

中国浙江省中国郁達夫研究会より提供された貴重なデータである。

4 映像コーナー

展示室のデジタルサイネージモニターで、パネルや展示ケースで紹介していない写真を流し紹介した。中では、郁達夫の八高時代の肖像写真、自筆の「自述詩」、郁達夫の姪である郁風（故人）が描いた故郷の山水絵などは、非常に貴重なものもあった。（全二十コマ、約五分）

むすびにかえて

以上のような本展示会は、わずか二週間の会期中に四百九十二人の入場者を得て、好評のうちに幕を閉じた。特に、期間中に『中日新聞』（二〇一五年十月四日・朝刊）と『朝日新聞』（二〇一五年十月七日・朝刊）二回の報道があり、来場者の増加に大きく貢献した。最終日の撤回作業中に、駆けつけてきた来客も居た。

しかし、本展示会の準備する時間の短さと、主催者の経験不足と計画性の乏しさによる行き届かないところがあることは否めない。今後の課題として残る。それにもかかわらず、会場に置いてあるメッセージノートに、森正夫名古屋大学名誉教授（元名古屋大学副総長）を含め、来場者の温かいメッセージが数多く書かれて、主催者の励みになる。

また、本展示会の連動企画として、展示終了後の十月二十五日（日）十四時～十六時、名古屋大学文系総合館七Fカンファレンスホールにて、高文軍による「中国人作家・郁達夫 入学百周年～旧制八高 青春の吟詠～」と題

する講演会を行った。

そして、本展示会の好評をうけて、会期終了後の二〇一六（平成二十八）年二月二十日（土）～五月十九日（木）の三ヶ月間に、名古屋市中心図書館（鶴舞）にて、引き続き展示することは決まっている。なお、『名大トピックス』N. 二七一の「部局ニュース」に、『中国人作家・郁達夫八高入学百周年』記念行事を開催」と題して掲載した。

（こう・ぶんぐん 桜花学園大学大学院人間文化研究科）

※関連講演会

名古屋大学大学院文学研究科中国文学研究室主催した中部地区中文交流会
及び国際言語文化研究科主催講演会

「吟じながら独り行き―郁達夫の名古屋に在りし日々」

講師：高文軍（桜花学園大学 教授）

日時：二〇一五年八月一日（土）午後二時から三時

二〇一五年十月二十五日（日）午後二時から四時三十分

本講演の内容は、『名古屋大学中国語学文学論集』第二十九輯（二〇一五年十二月）に掲載した。



名古屋大学中央図書館南階段



名古屋大学中央図書館前



展示室の様子②



展示室外



展示室の様子③



展示室の様子①



展示室の様子④



展示室の様子⑥



展示室の様子⑤

郁達夫八高入学百周年記念展

郁達夫

八高入学百周年記念展



二〇年前の大正四年九月、一人の中国人の若者が名古屋の地にやって来た。名は郁文、字達夫。旧制第八高等学校大学

予科第三部（医科）に入学。翌五年九月、

第一部丙類（文科）に転じ、合せて四年間

名古屋で高校生活を送った。彼は何を経験し、何を残したのか。

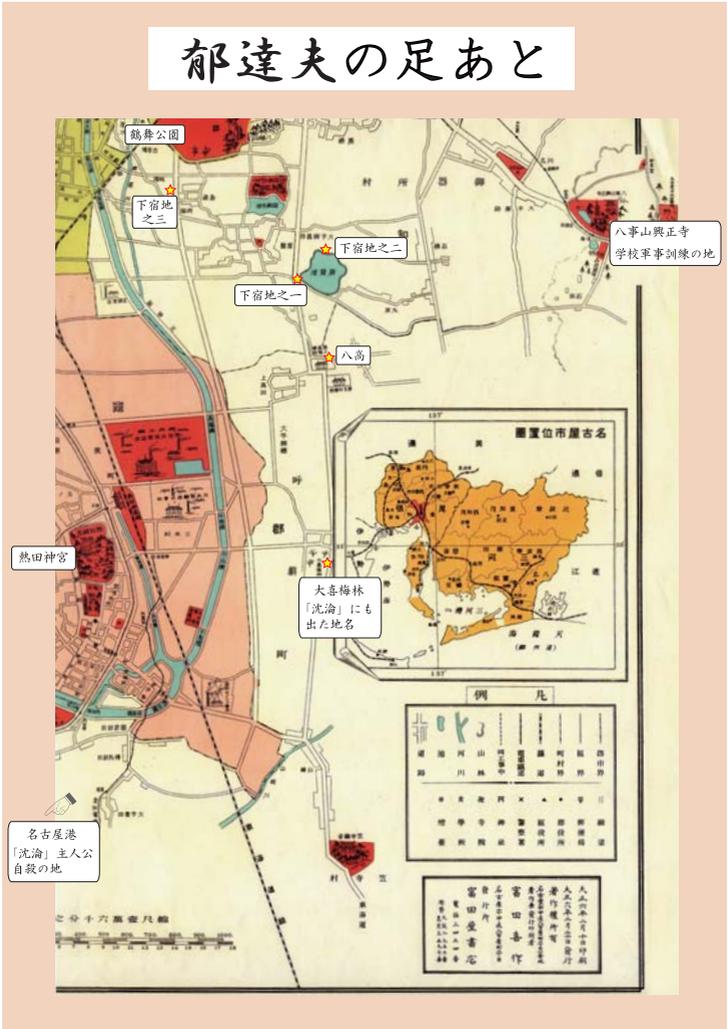
彼の輝かしい青春の足跡をここにたどる。



写真3 大正五年夏、第八高等学校の最初の数学教室の写真。旧制第八高等学校開校から二十一年、同年代が室内撮影。

郁達夫の足あと

郁達夫の足あと



日本語

日本語(節録)

| | | | |
|------------------------------|----------------------------|------------------------------------|--------------------------------|
| 碧玉は華年想うところあり 碧玉は華年想うところあり | 珠喉解唱浄瑠璃 珠の喉は浄瑠璃唱うことを解す | 戀音を我れ隨川のために戀く 戀音を我れ隨川のために戀く | 泣泣傾聴幼婦詞 泣を忍んで傾聴幼婦の詞 |
| 古紅衫子白羅巾 古紅衫子白羅巾 | 高髻長眉解芙蓉 高髻長眉解芙蓉 | 廢費纏頭原不惜 費を纏頭に費すは原自惜しまず | 花売日 花を買うはただ花売人のためなり |
| 萬骨好放看花船 萬骨好放看花船 | 皇骨に好や放た公松の船 皇骨に好や放た公松の船 | 櫻滿長堤月滿川 櫻は長堤に滿り月は川に滿り | 遠岸微風歌宛轉 遠岸の微風に歌宛轉す |
| 誰家簾底弄三絃 誰か家の簾底に三絃を弄ぶ | 荒川俊 荒川俊 | 名織唱陽供奉珠 名織唱陽の供奉珠に織す | 宮詞巧製念家山 宮詞巧みに製す家山念う |
| 怪來源氏人爭説 怪しみぬ源氏人争て説くを | 會使君王一破顔 かて君王をして一たび破顔し | 眉には慈意を藏ひ髪には黄を塗る 眉には慈意を藏ひ髪には黄を塗る | 広き袖纏き燕尾の襟 広き袖纏き燕尾の襟 |
| 十五雲英初見世 十五雲英初見世に見わる | 猶羞向客喚權郎 猶羞向客喚權郎 | 吉原物見世 吉原物見世 | 小倉の清詞句仙ならんと欲す 小倉の清詞句仙ならんと欲す |
| 小倉妙選世爭傳 小倉の妙選世争いで伝う | 權他相玉麻姑爪 權他相玉麻姑爪 | 繼調鬚史數錢 繼に調鬚を繼ぎ更に錢を數う | 小倉百一首 小倉百一首 |

(原題「新選集」より「春巻」七)

1916年6月26日『新選集』、全12首

1917年6月八高『校友余雜誌』、第19号にも掲載

自述詩

自述詩 (節録)

一
 家在嚴灘の上住
 秦時の風物 晉山川
 翠桃三月花如錦
 來往春江有釣船
 九歲題詩四座驚
 阿連少小便聰明
 誰知早慧終非福
 鐵劍珊瑚器不成
 六
 左家嬌女字蓮輝
 帶我閑情賦百篇
 三月富春城下路
 楊花雪のこく雪けわりのこし
 一たび是を失て去の恨を嗟ず
 昔人の詩句 意何んぞ深き
 広平梅花を賦してその後
 碧海青天夜後心
 七
 一先足成千古恨
 昔人詩句意何深
 廣平自賦梅花後
 碧海青天夜後心
 十
 高生十五無他嗜
 只愛蘭臺合史書
 忽遇江南吳祭酒
 梅花雪裏學詩初
 十四
 離家少小誰曾恨
 一聲青山喚不應
 昨夜夢中逢母別
 可憐枕上有紅米

家は嚴灘の上りにありて住
 秦時の風物 晋の山川
 翠桃三月花錦のごとし
 春江を來往して釣船あり
 九歳の詩を題して四座驚
 阿連少小にしてなわ聰明
 誰か知らん早慧終に福にあらずを
 鐵劍たる珊瑚器 照らす
 左家に嬌しき女あり字は蓮輝
 わが閑情を實して百篇を賦す
 三月富春城下路
 楊花雪のごく雪けわりのこし
 一たび是を失て去の恨を嗟ず
 昔人の詩句 意何んぞ深き
 広平梅花を賦してその後
 碧海青天夜後心

家は離るるこゝ小誰かかへ恨れんや
 一聲の青山喚ども應はず
 昨夜夢中に母と別るに逢う
 可憐枕上には紅米あり

(節録「自述詩」より)

1918年5月～12月、自筆原稿、全16首

小説「沈淪」(1)



当時の中国文壇に大きな影響を与えた「沈淪」。
邦訳あり（一九四〇年東成社岡崎俊夫訳等）



「沈淪」 ちりりん

中国近代文学青春小説の先駆とされる「沈淪」。大正初期の名古屋を舞台に、異郷に学ぶ孤独な高校生の性的な抑圧と母国の民族的な屈辱感を重ねて、青年の素直な感情を大胆に告白、出版された当初その大胆率直な自己暴露と、赤裸々な性欲描写が不道德だと激しく非難された。八十年代から、中国でも再評価。

冒頭はワーズワースの詩集を読みながら、学校周辺の田舎道を歩くシーン。最初の下宿先で、大家の娘の入浴姿をのぞき見していることがばれ、恥ずかしさのあまり外に駆け出す。歩き回るうちに、幻想的な梅林に迷い込む。或る日、梅林であいびきする男女の姿を目撃。青年は自殺しようとな名古屋港付近を徘徊するうちに、いかがわしい料理屋に入ってしまう。最後は「ああ祖国、お前がおれを死なせるのだ。早く豊かになってくれ。強くなってくれ。お前のもとには、なお多くの苦しみあえぐ若者たちがいるのだ」と結んでいる。



朝五時、空はしだいに白んで来た。窓からのぞくと、かすかに青味を帯びた空はまだ夜色に包まれていた。顔をつき出してみると、淡い朝もやが一幅の天然の絵の中にたちこめている。彼は思った。

「こんな秋晴れの好天気だったのか、おれの運もまんざらではないぞ」

一時間の後、汽車はN市の停車場に到着した。

一名名古屋駅着 小説「沈淪」より、下岡

(写真は当時の名駅)

小説「沈淪」(2)

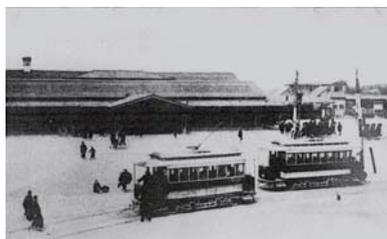
汽車を降りると、駅でひとりの日本人学生に出会った。制帽に二本の白線があったので、高等学校の学生であることがすぐ知れた。彼は虫み寄ってその学生に脱帽し、たずねた。

「第×高等学校はどちらですか」

「いっしょに行きましょう」

学生はそう答えた。

彼は学生のあとについて駅を出、駅前から電車に乗った。



鶴舞公園で下車した。…

公園をぬけ、稲田の細い道に出たとき、太陽はもう顔を出していた。稲にかかった露が玉のように光っている。前方には林があり、木の間にぐれに農家が点在していた。煙突が二、三本農家の屋根につき出し、早朝の清気の中にひめやかに浮かんでいた。一すじ二すじ青い煙が、香炉の煙のようにゆれていたので、農家で朝餉のしたくをしているのが知れた。

—鶴舞公園

(写真は、当時「共進会」会場である鶴舞公園、方向は小説と逆)



園公舞鶴りよ近附遼天年三十四治明部一の内區地の前工起む壘を場會並共る村原に

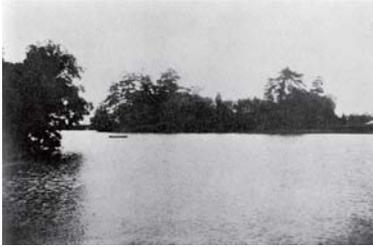
しばらく見とれたあと、彼はふと背後に紫露蘭の息吹きを感じた。さらさらと音をたてた道端の小草が、彼の夢幻境を破った。ふりむくと、その小草はまだ揺れている。紫露蘭の息吹きを帯びたそよ風が、彼の蒼白い顔にあたたかく吹き寄せた。

—下宿付近の田園風景
(写真は当時の御器所村)

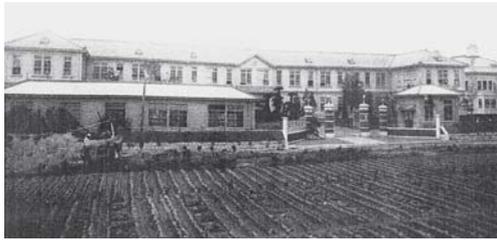


大正時代は草木雑然とした粗放農耕地

小説「沈淪」(3)



彼の下宿は孤立した一軒家で、四方どこにも隣家はなく、左手の門の外は往来で、前後はみな田圃、西側は溜め池、そのうえ学校が始まるまでは他の学生も来ないので、この広い下宿に客は彼一人であった。(中略)窓外の梧桐の木は、わずかな風にもざわざわ音をたてる。二階に住んでいたので、梧桐の葉音は彼の耳に近かった。彼は恐ろしさのあまり、泣き出さんばかりになった。都会への郷愁(Nostalgia)をそのときほど激しく感じたことはない。



授業のときは、全クラスの学生にかこまれていながら、彼はいつも孤独であった。衆人の中で感じるこの孤独は、一人静かな場所にいるときの孤独よりも、さらに耐えがたいものであった。学友たちはほと見ると、それぞれ喜々と先生の話に耳をかたむけている。ただ彼だけが、身は教場にありながら、心は浮雲のようにとりともめない空想に走るのであった。

(小説では、学校は苦痛に耐えがたい場所としたが、郁達夫を知る人々の追想では、彼は語学力拔群の温和・寡黙な文学青年で、教授からも級友からも重く見られていた。)

(田畑の真中に殺風景に立っている八高校舎の佇まいから開校当時の雰囲気が浮びあがっている。)

はじめはちょっと見ですぐひきかえすつもりでいたのだが、一目見るや釘づけにされたように動けなくなった。

雪のように白い二つの乳房

ふくよかな白い太もも

全身の曲線

息をもつかず眺めまわすうちに、顔の筋肉までが痙攣を起してきた。見れば見るほど震えが激しくなり、ついには震える額をガラス窓に打ちつけてしまった。すると蒸気につつまれた全裸のイヴは、

「だあれ」

となまめいた声を発した。

彼は声もたてず、あたふたと便所を出るや、飛ぶようにして二階へかけあがった。



(小説のモデルとされる「隆児」は、実は下宿ではなく、雑貨店の娘)

(写真は当時の下宿地の一つと推定される。)

小説「沈淪」(4)



両側の高い崖のところを通り抜け、左手の斜面に目をやると、崖に隣接する山の斜面に飯垣があり、何軒かの茅屋をかこんでいた。茅屋の入口には「香雪海」と記した匾額がかかっていた。(中略)

頂上の平地の西側は千仞の絶壁で、向かいの絶壁と相對峙しており、その二つの絶壁の間に、いま彼が歩いてきた南北に通ずる道があった。(中略)花園には梅の古木が横たわっていた。芝生の南端、山上の平地がまさか南に向かって下りようとする所に、梅林の由来を記した石碑がひとつ立っていた。

上の写真は「沈淪」第五章に書かれた梅林はこと推定される。
(四十年代の考古発掘により、梅林は削られて今はない。)

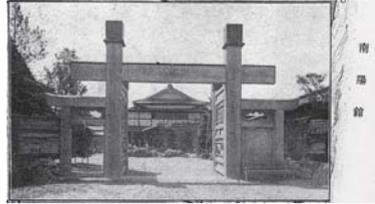


平野を通り抜けると、もう神宮前の電車停留所である。ちょうど折よく向こうから電車が来たので、彼はふいと飛び乗った。何のために乗ったかわからなかったくらいだから、どこ行きかたしかめるいとまもなかった。

十五分ばかり走ると電車は停った。運転手に乗り換えをうながされ、べつの電車に乗る。が、さらに二、三分走ると電車はまた停った。終点とさかされて下車すると、目の前は築港であった。

(写真は熱田停車場)

小説「沈淪」(5)



東岸へ渡ってしばらく行くと、岸べに大きな屋敷がみえた。表門は広く開け放し、庭園の造作は実にみごとであった。彼はかまわずに、つかつかとはいっていった。すると数歩も行かぬうちに、前方の家の中から女のなまめいた呼び声が聞こえてきた。

「いらっしゃあい」

彼ははっとしてその場に立ちすくんだ。



西の方をみやると、灯台は赤と緑の光を交互に点滅させ、おのれの職務に余念がない。光が海面を照らすと、海面には淡く青みのさしたひとすじの道が現われる。西の空を仰ぐと、藍黒色の空に宵の明星が浮動していた。

「あの揺れ動く明星の下がおれの故国だ。おれの出生の地だ。あの星の下で、おれは十八年の春秋を過ごした。ふるさとよ、おれはもうお前と再び相まみえることもなくなった」

歩きながら、彼はひたすら悔ましげな言葉ばかりを心にならべた。しばらく歩いてから、ふたたび西天の明星に目をやると、涙が驟雨の如く流れ落ち、あたりの景色がみな模糊としてきた。涙を拭き、歩みを止め、長嘆息したあと、彼はとぎれとぎれにつぶやいた。

「ああ祖国、お前がおれを死なせるのだぞ」

「早く豊かになってくれ！ 強くなってくれ」

「お前のもとには、なお多くの苦しみあえぐ若者たちがいるのだ」

文学人生の序章（1）

名古屋在学中の四年間（1915～1919年）、郁達夫は犬山を始め中部地方の山水風景に親しみ、各地で漢詩を書き残した。

犬山

大正五年春、一年生の郁達夫初めてのお出かけ、はじめて地方の新聞へ投稿。漢詩欄の選評服部担風先生がそれを高く評価す。



「犬山堤小歩見櫻花未開口占二絶」

尋春我愛著先鞭 梢上紅苞吐未全
一種銷魂誰解得 雲英三五破瓜前

歸帆淼淼擁雲煙 江上朝來霽色鮮
東望浣溪西白帝 此身疑已到西川

犬山堤小歩見櫻花未開口占二絶
達夫 郁文 和服人
尋春我愛著先鞭 梢上紅苞吐未全
一種銷魂誰解得 雲英三五破瓜前
歸帆淼淼擁雲煙 江上朝來霽色鮮
東望浣溪西白帝 此身疑已到西川
前首、小杜尋春、雲英未嫁、一種銷魂、髣髴詭笑、後首、寫景帶情、自能引人入勝、妙在無影、建之振、擔風學人手批



文学人生の序章（2）



志勢之遊

①

一九二八（大正七）年春



その日彼は、雨上がり後に照りつける太陽の下で、険しい岩石が突き立つ溪谷に沿って、珪石の交ざる土道の山路を歩き登り、温泉地旅館の紅葉館に着いた時はもうすでに午後の五時を過ぎた頃だった。

—小説「風鈴」より（湯の山での体験は、のち小説「風鈴」（別名「空虚」）の基となる）

峯巒都似緑雲巖 一道清溪曲又弯
日暮欲寻孤店宿 斜風细雨入汤山
—大正七年五月二十三日『新愛知』新聞
（国家指定文化財「水雲閣」からの眺め）



文学人生の序章（3）

志勢之遊

②

一九二八（大正七）年春

宿○山○温○泉 澀夫 郁又中 民
 峯○都○似○終○翠 一○道○浦○溪○明○又○晴
 日○暮○尋○孤○山○宿 斜○嵐○細○雨○入○海○山
 百○道○飛○泉○石○共○流 千○草○花○木○惹○清○愁
 離○人○一○夜○何○曾○睡 山○雨○山○風○橫○入○樓
 花○落○千○年○魂○不○返 東○風○吹○雨○杜○陵○嘴
 明○驛○有○蹄○路 乞○僧○天○公○二○日○晴
 昨○夜○松○仙○庵○裡○宿 今○朝○漕○浦○岸○邊○行
 彼○蒼○似○亦○憐○吟○客 開○放○南○天○半○角○晴
 絕○句○皆○以○舊○新○愁○逸○而○勝 夜○聞○猛○雨
 二○首 更○有○柳○塘 捲○風○學○人○手○批



「漕浦天忽放晴」

昨夜松仙庵裡宿 今朝漕浦岸邊行
 彼蒼似亦憐吟客 開放南天半角晴

（写真は、昔阿漕浦の景色。津市教育委員会
 「津市民文化」第三十一期より）



「登日和山口占一絶」

伊勢湾頭水拍天 日和山下女如泉
 嬉春我学揚州社 題盡西川十万箋

（写真は、鳥羽みなとまち文学館HPより）

文学人生の序章（4）



天龍川

「乗車赴東京過天龍川橋」

一種秋容不可描 夕陽江岸草蕭蕭 十年湖海題詩客 依舊青衫過此橋
 （大正六年十二月十七日）

「十二月二十七日宿熱海温泉」
 温泉水竹兩清華 水勢悠悠竹勢斜
 一夜離人眠不得 月明如夢照蘆花



熱海温泉



十二月二十七日宿熱海温泉
 漢夫 都文中華氏
 溫泉水竹兩清華 水勢悠悠竹勢斜
 一夜離人眠不得 月明如夢照蘆花
 又過一年將夢尋 不知青衫幾幾身
 人來如外名初賦 夢逐江潭已幾巡
 多別所須唯藥物 此生難了是相思
 明窗欲向空山過 爲飲東風笑我痴
 絕句 讀過酒面 無甚俗韵 上律自
 是才人本色 樽風翠人手批

文学人生の序章（5）



京都嵐山



願向叢林借一枝

「借某登嵐山」

不怨開遲怨落遲 看花人正病相思
可憐逼近中年作 都是傷心小杜詩
煙景又當三月暮 多情虛負五年知
嵐山倘有閑田地 願向叢林借一枝
(大正七年四月)

文学人生の序章（6）



養老山

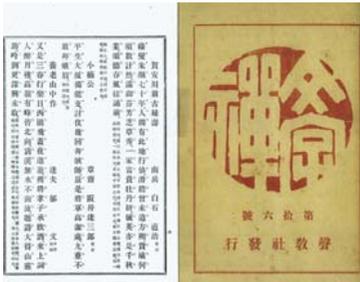
「養老山中作」

又是三春行樂日 西園飛蓋夜遨遊
 携將孝子承歡酒 來上詞人醉月樓
 高嶺有峰皆北向 清溪無水不南流
 題詩大得山靈助 吟到更深興未收

——大正七年四月十二日「新愛知」新聞、
 『文字裡』第10号も掲載



清溪無水不南流



服部擔風との交流（1）



名高い漢詩文学者服部擔風、当時『新愛知』漢詩欄の選評者。郁達夫の投稿詩を高く評価。大正五年暮春、二十歳に満たない八高生郁達夫は、五十歳の服部擔風を訪ね、深く親交を結んだ。郁が「訪擔風先生道上偶成」の詩を書き（写真）、擔風先生は「次韻詩」を以て評語とした。

弱冠欽君来海東 相逢最喜語音通
落花水榭春之暮 話自家風及国風



「みそぎはし」服部擔風の手書き。当時、高名な日本の漢詩人が、この道に沿って若い中国人留学生を弥富駅まで見送ったことは、日中文化交流史の佳話として伝えられる。



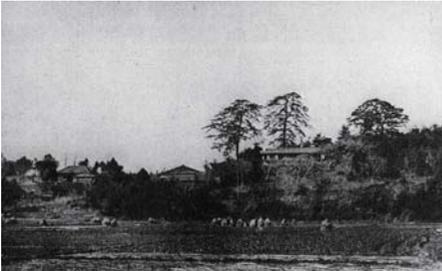
行盡西郊更向東 雲山遙望今還通
過橋知入詞人里 到處村耆說擔風

服部擔風との交流（2）

大正五年秋、文科に転じた郁は、三重県桑名の愛宕楼（阿誰児楼）に赴き、擔風主宰の佩蘭吟社の中秋観月の雅集に出席、席上真つ先に七言律詩を作って座客を驚倒せしめたという。

丙辰中秋桑名阿誰児楼雅集
分韻得寒

依欄日暮斗牛寒
千里江山望眼寬
未與嫦娥通醉語
敢呼屈宋作衙官
斬雲苦乏青龍劍
關韻甘降白社壇
剪燭且排長夜燭
商量痛飲到更殘



愛宕山呑景楼。松の木の下に長屋造りの建物が、当時の呑景楼（阿誰児楼）



阿誰児楼（呑景楼）玄関。しばしば服部担風の佩蘭吟社の会場となった。原長徳如氏によれば大正初年には石段は無かったとのこと。桑名市福山。

服部擔風との交流（3）

百年前、郁達夫を温かく迎えた藍亭は、幾度か移転されたが服部擔風を敬愛する人々の手により、今も保存されている。

右の額は、服部擔風の手跡



重訪藍亭有贈

一向山陰訪戴來 詞人居里正花開
去年今日題詩處 記得清遊第二回

服部擔風、余有次韻詩云、

襖橋村路客重來 紅葉紫藤隨處開
欲問江南詩句好 三生君是賀方回

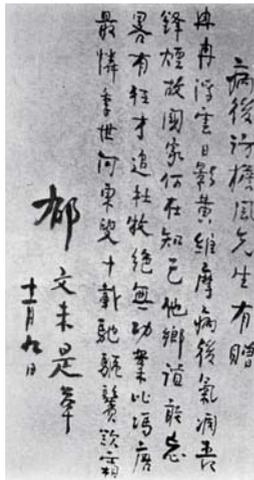
— 『新愛知』大正七年五月二十二日

ほか七律もあり

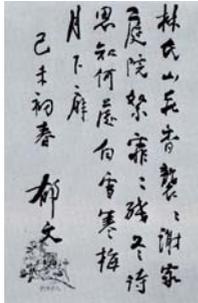
病後訪擔風先生有贈

冉冉浮雲日影黃
維摩病後氣凋喪
烽煙故國家何在

知已他鄉誰敢忘
略有狂才追杜牧
絕無功業比馮唐
最憐季世河東叟
十載馳驅鬢欲霜



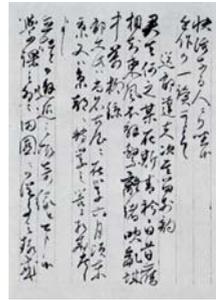
服部擔風との交流（4）



大正八年の正月、恒例の藍亭小集に、郁達夫が「新正初四藍亭小集賦呈擔風先生」という五言律詩のほか、この七言絶句も書き、当時15歳の少年角田膽岳に贈った。



弥富市漢詩愛好グループ「親風会」が中心となり、擔風先生と郁達夫の親交を記念し、地元に詩碑を建てた（平成15年）。



大正九年四月、八高を卒業直前、郁達夫は惜別の詩を書いた。「将去名古屋別擔風先生」：

到處逢人説項斯 馬卿才調感君知
 瓣香倘学涪翁拜 不惜千金買繡絲

写真は、担風の次韻詩、「送郁達夫文次其留別詩韻」：

君去何之某在斯 青衿白首舊相知
 春風不解繫離緒 吹亂城中萬柳絲



弥富には、今も服部擔風を偲ぶ孝忠園詩碑、筆塚がある。

服部擔風との交流（5）

郁達夫が名古屋去る際、服部擔風が描いた送別の詩と絵。
現在中国浙江省の実家に保存されている。



郁達夫早期文學略表

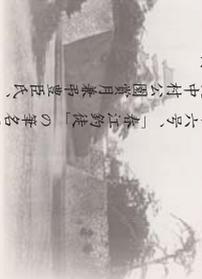


郁達夫

(中國著名作家劉慶霖九八題)

早期文學略表

- 一八九六年(家誕)
清國(中國)浙江省富陽縣に生まれる。
- 一九一三年(十七歳)
中華民國政府から日本視察に派遣された長兄に伴われて来日。
- 一九一四年(十八歳)
(東京)第一高等学校(持波字科)に入学。
- 一九一五年(十九歳) 九月
第八高等学校に入学。
- 十月
八高『校友會雜誌』第十六号、「春江釣徒」の筆名で、重陽日鶴舞公園春木雁花、中秋夜中村公園寶月兼甲斐氏、基督御器所寓公二十四首の漢詩を掲載。



郁達夫早期文學略表

| | |
|-------------|---|
| 五月 | 『新愛知』五月二日、火山堤小歩亂桜花未開占一絶 八高『校友會雜誌』第十七号、晴雪園卜居を乞十一首 『新愛知』五月十四日、由柳橋祭車巡遊一宮天山道正作 |
| 六月 | 『新愛知』六月十四日、訪担風先生道上偶成 『新愛知』六月二十六日、日本遠遊錄九首を乞 |
| 九月 | 八高三部（医科）から一部（文科）西類に転科。 |
| 一九一七年（二十一歳） | 六月 四年ぶりの帰省、のち妻なる孫壺と見合ひ 八高『校友會雜誌』第十九号、達夫、日本遠十首 七月 『新愛知』七月二十四日、西塚雜詩（七首） 八月 『新愛知』八月二十七日、西塚雜詩（二首） 十月 『新愛知』十月十四日、臨行有寄（三首）、等々 |
| 一九一八年（二十二歳） | 一月 『新愛知』一月二十六日、十二月二十七日留熱海温泉（二首） 四月 『新愛知』四月十二日、春老山中作『文字禪』第十六号にも掲載 五月 『新愛知』五月十二日、重訪藍亭有贈 綠茶花燈祭藍亭遊返至 恭平上車後作此贈之 『新愛知』五月二十三日、宿海山温泉 夜間猛雨風勢驟様（二首） 暹清天忽放晴、乞之 |

郁達夫早期文学略表

| | |
|-------------|--|
| 十二月 | 『新愛知』十二月一日、病後訪担風先生有贈『文字禪』第十四号にも掲載） 自述詩序（十八首）（自筆原稿） |
| 一月 | 一九一九年（二十三歳） 『新愛知』一月二十八日、新正月初四藍亭小集賦呈担風先生（隨贈）（一七三号にも掲載） |
| 二月 | 『文字禪』第二十五号二月十日、鄒郊独立、日暮蒼然、顧影自傷、凄然得句 |
| 四月 | 『隨隴集』一七四号四月十五日、將去名古屋別担風先生 |
| 七月 | 第八高等學校卒業 |
| 九月 | 東京帝國大學經濟学部入学 |
| 十月 | 『新愛知』十月十六日、新秋偶成 東京、佐藤春夫、井伏鱒二と交流するようになり、小説の執筆を始める。 |
| 一九二一年（二十五歳） | 郭沫若ら中國人留學生と文藝団体「創造社」を創設。上海の書店から、短編小説集『沈淪』を出版。 |
| 一九二二年（二十六歳） | 東京帝國大學經濟学部を卒業。中國に帰国し、教員、雑誌の編集しながら創作活動を続ける。 |



郁達夫早期文学略表

一九二二年(二十六歳)

東京帝國大學經濟學部卒業。中国に帰国し、教員、雑誌の編纂をしながら創作活動を続ける。

一九二三年(二十七歳)

北京大學で統計学などを教える。同大学の講師を兼任していた魯迅と交際するようになる(与武昌大學、広東大學教授)



一九三六年(四十歳)

福建省政府主席に請われて省政府参議に就任。十四年ぶりに日本を訪問、佐藤奏夫、横光利一、林芙美子、志賀直哉ら多くの文学者と懇談。

一九三八年(四十二歳)

國民政府軍事委員會政治部第二厅設計委員となり、抗日宣传活动、前線各地の視察慰問に従事。

一九四二年(四十六歳)

日本のシンガポール占領を避けてマトラ島に潜伏、身元を隠して日本軍憲兵隊の通訳などとして働かされる。

一九四五年(四十九歳)

日本降伏後、日本軍憲兵隊に拉致され、九月に絞殺される。



展示ケース①「沈淪」



展示ケース②「沈淪」



展示ケース③「沈淪」



展示ケース④「沈淪」



展示ケース⑤文学者の人生の序章



展示ケース⑥文学者の人生の序章



展示ケース⑦服飾部担風との交流



展示ケース⑧書籍



展示ケース⑨書籍



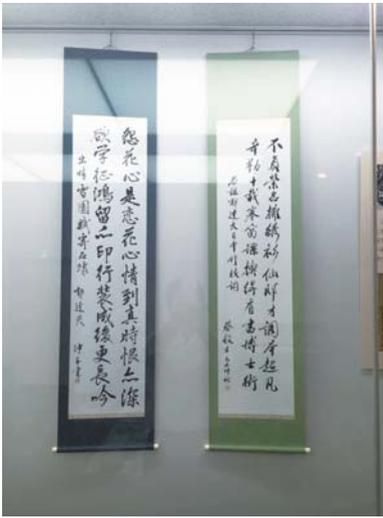
展示ケース⑩書籍



展示ケース⑪書籍



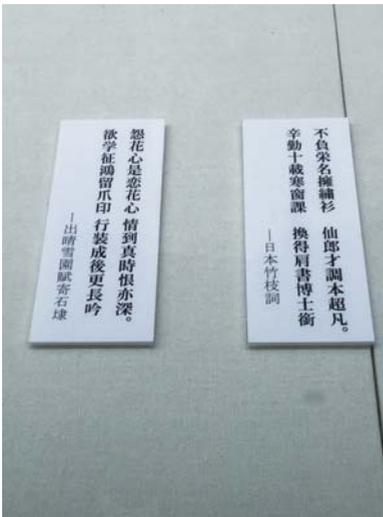
展示ケース⑫郁達夫研究書



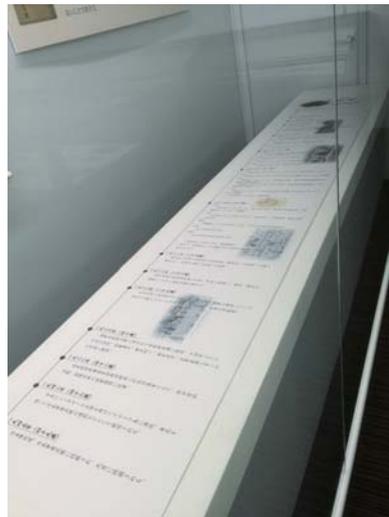
展示壁 郁達夫詩



郁達夫早期文学略表①



郁達夫詩キャプション



郁達夫早期文学略表②



展示書籍



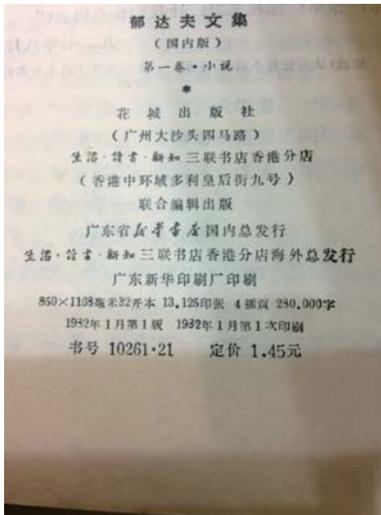
展示書籍『沈淪』



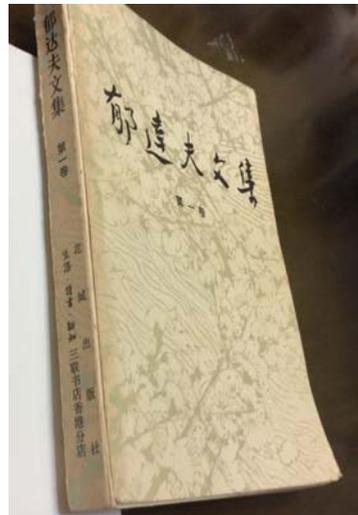
展示書籍『现代中国文学』



展示書籍『八高一覽』



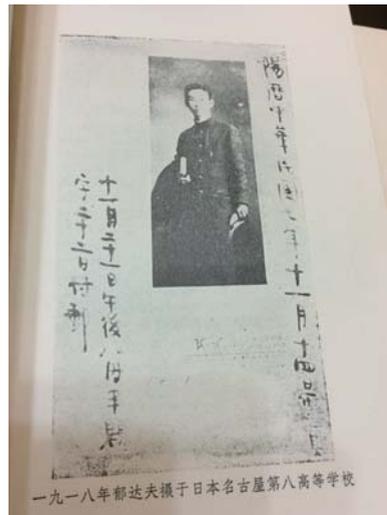
展示書籍『郁達夫文集』③



展示書籍『郁達夫文集』①



展示書籍 郁達夫傳記、論ほか



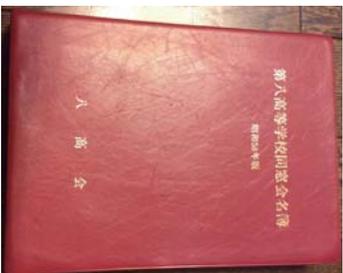
展示書籍『郁達夫文集』②



展示書籍 『郁達夫資料』全五冊



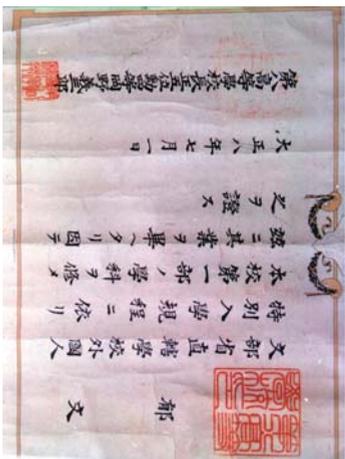
2015年出版した研究書 『郁達夫と名古屋』



『八高同窓会名簿』①



『八高同窓会名簿』②



サイネージデータ①卒業証書

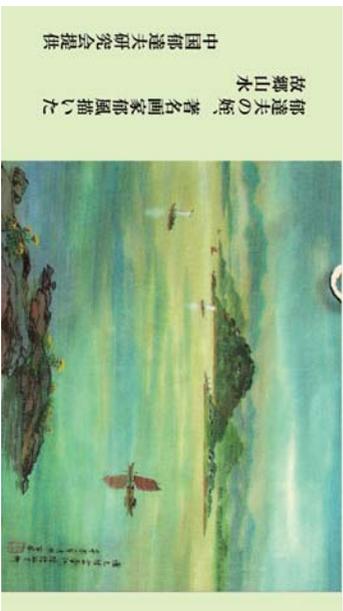


サイネージデータ②肖像2



高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影 高文筆影

サイネージデータ③自筆「自述詩」



サイネージデータ④郁風絵



郁達夫詩②



郁達夫詩①



展示期間中の新聞報道②



郁達夫詩を揮毫した蔡毅南山大学教授

郁達夫 八高入学100周年記念展示



今から100年前、八高に入学した中国人郁達夫は、在学中多数の漢詩を発表、名古屋周辺の風光を詠じ、のち自分の留学経験を基に、小説「沈淪」を書き上げました。
ゆかりある名古屋大学で記念展示会を行います。

期間：2015年9月26日～10月9日

※10月9日は午後3時まで

場所：名古屋大学中央図書館ビブリオサロン

主催：名古屋大学文学研究科中国文学研究室

・高文軍（桜花学園大学教授）

デザイン・製作：王莉莉

中国人作家・郁達夫

入学100周年 ～旧制八高 青春の吟詠～

講演会
10/25

&

記念展示会
9/26-10/9

講演：高文軍（桜花学園大学教授）

日時：2015年10月25日（日）14:00-16:00

会場：名古屋大学文系総合館7Fカンファレンスホール

言語：日本語

参加費：無料（申込不要）



郁達夫（Yu Dafu, いく たつぷ 1896-1945）

浙江省富陽県の人。中国の民国期を代表する浪漫派の作家として知られる。1913-1922年日本留学。

1915（大正4）年旧制第八高等学校第三部（医）に入学、翌年第一部丙類（法・文・仏語）に転じ、1919年（大正8）年卒業。代表作「沈淪」は八高時代の多感な心情と彷徨感覚を描いている。また在学中、校友会雑誌、新愛知新聞に多数の漢詩を発表、名古屋、犬山はじめ尾張・美濃・伊勢の風光を詠じている。

1945年終戦後、スマトラ島で日本憲兵に殺害された。

主催：名古屋大学大学院国際言語文化研究科

協賛：桜花学園大学、南山大学アジア・太平洋センター、八高会

JACRC  「アジアの中の日本文化」研究センター

<お問い合わせ>

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 星野幸代 e-mail:hoshino@lang.nagoya-u.ac.jp

記念展示会

開催期間：2015年9月26日（土）～10月9日（金）

会場：名古屋大学中央図書館ビブリオサロン

主催：名古屋大学大学院文学研究科中国文学研究室、高文軍（桜花学園大学教授）

協賛：桜花学園大学、南山大学アジア・太平洋センター、八高会



瑞穂に建つ八高新校舎（1909—1945。現在、名市大山の煙キャンパス）



名古屋の漢詩人・服部担風から郁達夫へ惜別の画と題詩（1919年）